



KANSAI UNIVERSITY

# CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

# Newsletter

関西大学 教育開発支援センター  
ニュースレター

December 2016

vol. 22

## 能力と「スタッフ」

教育開発支援センター長 田中 俊也



私たちの組織・教育開発支援センター (CTL) は、2008年にセンター化し、専任教員を現在ではフルの4名を抱える、国内でも有数のFDセンターとなって参りました。4名のスタッフはそれぞれの領域での第一人者であり、国内の同類の組織や機関からの講演依頼や来訪が絶えません。

その、国内での評価や安定したステイタスが、残念ながら学内では十分な認知がなされているとはいいがたい部分があり、学内の方から「何やってるの?」「何をやるの?」と、いまだに問われることもあります。

そのわかりにくさの原因の1つに、FDということばで活動全体を代表させようとするところの強引さがあるように思えてなりません。FDはいうまでもなく“Faculty Development”の略語であり、大学教育の文脈ではFacultyは、ある時は「学部」、あ

るときは「教員集団」等と訳されます。

一方で、能力についての心理学の文脈では、Ability、Capacity、Capability、Competence、Talentなどに並んで、もう1つ、Facultyということばがあります。行政や事務など実務的な能力で、大学教育の文脈でこれとDevelopmentをくっつけて「FD」とされ、大学教員に対して用いられることが多くなっています。大学教員にとってのその「能力」とは、当然「教授・教える」という能力のこととなり、大学教員の専門性の多様性から、さまざまな種類の教え方が存在します。その両極端をとれば、ある人は基礎的な知識を「教え込む」ことが重要と考え、また別のある人は「教えない」ことが教えることだという逆説的な立場を主張します。いずれも確たる信念でそういう教授活動をされます。

そうすると、そうしたFacultyをDevelop

するとはどういう意味を持つのでしょうか?外から「開発していく」(develop)べきものなのでしょうか、あるいは潜在的な「発達」(develop)可能性を信じて、適切な環境整備に専心すべきなのでしょうか?

FDについてはそうしたアプローチの選択・融合に尽きる、と考えますが、今般、2017年度から「SDの義務化」という流れがきています。ここでのSとはStaffのことであり、狭義には事務職員という意味合いを持ちますが、今回は広義の「スタッフ」で、学長・副学長等も含む大学のガバナンスに関わるメンバーすべてを含んでいるようです。

さあ、そのDevelopmentの施策、FDと切り分けて考えるか、全学的な「能力」開発の政策とみなすか、判断のわかれる難しい課題をつきつけられています。教学・法人一体となって通り組まねばならない大きな課題だと考えています。